

これにより衣師団の陰騭馬はもちろん北支軍にも知れて衣師団外の部隊からの依頼もあり、合わせて十五、六頭の手術を行い、全頭成功して戦力の増強に役立った。

その五

衣師団の通信隊、病馬廠は済南の郊外にあり、隣接して隼航空隊が駐屯していた。

昭和十九年暮ごろより米軍機（P51）の襲撃が始まり、航空機、鉄道、列車を目標に逐次その回数が増してきた。また、B29が済南上空を通過して北九州、満州の鞍山等の工業地帯の爆撃を行ったが、今日は九州か、満州か、済南上空の飛行方向で判断されたものだった。

このような戦況になり、通信隊、病馬廠の馬を守るため、防空壕の掘削が始まった。壕は深さ二メートル以上、幅三メートルぐらいの大きさで、七、八十頭分が必要だった。毎日、地元の苦力を四、五十名雇用して行ったが、運搬車両は藁のモッコを担ぐ手段で能率は上がらなかった。さらに午後になると苦力が腹が減って土砂が運べないという始末で、叱ろうが、叩こう

が、一向に効果がない。そこで馬糧の高梁を失敬して粉にさせ、饅頭を作って午後支給し工事を急がせた。出来上がってから五、六回の空襲を受け、廠長以下全員で退避したが、米機の目標は馬でなく損害はなかった。

昭和二十年春には隼航空隊の戦闘機も何処にか転戦し姿はなく、米軍機のなすがままのようだった。

日支事変・出征従軍記録

大阪府 若杉米一

昭和十四年八月三十日午後十一時三十分ころ「電報、電報」と呼ぶ声にて目を覚ます。何があったのだろうか、表に出て見ると、富山からの電報ですと手渡され、局員の方から「おめでとう」といわれ、はつと召集だと思った。局員の方に「御苦労様」と言っ受ける。

「ヨネイチ ショウシユウ ガ キタ スグカヘレ

イサク ヘンマツ」

召集日は、昭和十四年九月二日となっていた。

その時、村役場の火の見櫓の鐘が鳴り、火事だと、飛び出して見ると火事の方向が分からない。

家に帰り召集令状を持ち、近所に住む妻の姉、高田コハルさん宅に知らせに行つてくると、出かける。義姉に報告している所へ、妻の父、原信吉が報を知り来る。九月二日に入隊、八月三十一日午後出発すると告げ帰宅。

早朝より手分けをし、富山に電報を打つ者、身支度する者、等々。自分は仲人の北山助蔵氏に電話連絡する。その足で会社に行き、報告し帰宅。身内全員で昼食をとり、十四時頃、旧南島泉の人達の見送りを受け出発。高鷲駅前にて見送っていた方々に、敬礼し、「本日お忙しい中、わざわざ御見送り下さいまして、有難うございました。家には妻や子供を残しておりますので、何分宜しくお願ひ致します。では行つて参ります」と礼を述べた。

ホームに阿倍野橋行き電車が入つて来る。「バンザ

イ、バンザイ」の声を後に発車。車内では、交番所の安浦氏も見送りのため乗車、阿倍野橋駅まで送つてもらう。嬉しかった。

途中、淀屋橋で下車、勤め先に挨拶をし、社長始め社員一同の方々も大阪駅まで轟くほどの声で「バンザイ、バンザイ」道行く人達も「バンザイ」と見送つて下さる。

「バンザイ、バンザイ」の声を背に、大阪を發ち、妻、子供と一路故郷へと向かう。京都、大津からも金沢連隊に入隊する召集兵が乗り込んでくる。早朝、富山大門に着く。布目沢の実家では、母、兄始め一同が迎えてくれる。

夜、村の会場にて送別会。帰宅後、子供達と一夜を、母と兄が私を呼び、酒を酌み交わし、母が私に曰く「戰場へ行つたら国のため死ぬ。捕虜になるな。なつたら舌を噛み死ぬ」と言われ、私は日本国のため死ぬことを覚悟する。

翌日、母校の楠田小学校へ、在校生一同、音楽隊のバンザイ三唱で大門駅に向かう。母と固い握手をし、

兄、妻、子供達と汽車に乗り込む。途中、高岡駅でも鳥谷タケコ、スミコが見送りに来てくれていた。嬉しかった。

目的地、金沢駅に。金沢第九連隊前、妻と子供に別れを惜しみ、敬礼をしながら営門を潜る。

(入隊後兵站自動車二百七十二中隊に編入)

兵站自動車二百七十二中隊は清水中隊盛田小隊川田第二分隊に編入、冬の軍服に着替える。分隊長は川田伍長。一二一号車、井畑一等兵、森二等兵。一二二号車、木倉一等兵、松尾二等兵。一二三号車、加志摩一等兵、若杉二等兵。一二四号車、吹田二等兵、屋堂二等兵になる。

初日、九時消灯ラッパ、井畑一等兵が「シンペイサン・カワイイワネ・マタネテ・ナクノカネ」と歌っている。その内、疲れて眠ってしまい起床ラッパで目覚める。営門点呼。朝食の前に川田分隊長より、「皆と、当分隊で一緒になったことは大変嬉しく思う。自分は、機械のこと、ましてや運転も出来ないが、力を合わせて大日本国のために尽くしていこう」と挨拶がある。

その日は、背囊に入れる品物の配給があり、一日を過ごす。

翌日から、来る日も、来る日も、初年兵訓練が続く。自動車の手入れのため、練兵場に向かう。作業終了後、営門前まで来ると、大勢の人が面会に来ていた。その中に妻と子供が、手を振っているのが見えた。帰阪する途中、会いに来たとのこと、十分話もできず営門に入る。

九月十日面会日。妻と子供、義父、母と兄来てくれる。九月十三日動員完結。九月十六日屯営を出て九時営庭に集合。部隊長、隊員、金沢市民の打ち振る日の丸、バンザイ、バンザイの見送り。冬軍服のため暑く汗が流れる。金沢駅に向かって行軍中前方に「若杉米一出征」と書かれた旗を見る。兄である。母、家族のことを頼み大阪駅十時頃通過と電報を頼む。広島に向けて出発。福井駅では市内工場の女子青年団の見送り。大阪駅五分停車。義父、義姉、妻と子供達、北山氏が来てくれていた。翌朝広島駅着。九月十八日正午乗船すること、これが日本との別れかと心細くなる。

十四時三十分乗船始まる。その時、大きなバンザイの聲、声、もう二度とこの地に歩いては帰ることが出来ぬかと万感胸に込み上げ、目頭が熱くなる。見送っていたいただいた方々に「有難う、国のため元気で戦つて来ます」と乗船する。「板屋丸」に全員乗船、宇治港出帆。

瀬戸内海を南下、経路、島々では大きな日の丸を振り見送りを受ける。玄界灘を航海、左側は一面草色の海、右側は朝鮮半島が、北の方向に向かって玄界灘を無事通過。九月二十二日大連港入港、上陸。同日関東軍司令官の隷下に入る。

同日より本隊は大連柳町通りの民家に泊まる。出発まで毎日初年兵訓練が続く。二百三高地へも訓練に行く。青い林檎の木の下での食事、初めて見るホロ馬車、汽車の鐘の音（汽車の事を「火車」「ホウシヤと呼ぶ）多々珍しいものばかり。それも束の間の休息。中隊長が命令受領のため奉天へ、ノモンハン事件も話がつきほつとする。清水中隊長来隊され、本隊は北支に。十月二日大連国防婦人会の見送りを受け屯営を後にする。

満支国境山海関通過、同日北支那方面軍司令官の隷下に入る。

保定駅通過、途中軍用列車とすれ違う。この列車に義兄高田利三郎伍長が内地帰還のため乗車していたと後で聞く。列車着く、何事もなく無事邯鄲駅に到着、本隊と合流、邯鄲城当地区警備をする。その後、金沢第九師団に派遣になり、路安作戦に参加する。邯鄲城を後に、数時間後路城に到着、大休止になり当地区警備をしている部隊は金沢九連隊と知る。出発の際、兄より北支なら同級生の大角君が金沢九連隊に配属されているからと聞いていたので、会えるかと騎兵隊に聞くと属しているとのこと、連絡をとり再会する。嬉しかった。北支山西省で同郷の友に会えるとは思議なくらいである。共に路安作戦に参加するとは、互いに元気に国のために戦かおうといって別れる。そして部隊は北進を続けた。

凍りついた河を渡り夜間行動中、内地出発以来初めての敵兵と激戦、自動車を反転させ銃を構え初めての戦闘で髪の毛は一本、一本立ち、冷や汗が。その時、

自分は車よりビールを持ち出しドアで叩き栓を抜き一
気に呑み、その勢いで立ち向かう。だが敵の砲撃、小
銃攻撃もなかなか止まず。数時間後、敵側近くで爆発
する。一〇九連隊騎兵隊が応援に来てくれ数分後撃退
することが出来ホッとする。その夜は後方に下がり支
那人の家のオンドルで暖をとり一泊する。

明け方前線へ向かって出発、先発の本隊、自分たち
の小隊も路安城へと行動す。戦闘部隊一三五連隊、一
〇九連隊と合流、敵兵八路軍を撃退する。盛田第一小
隊、川田分隊は後方より食糧、弾薬の輸送、帰路は負
傷兵を野戦病院へ輸送に邁進す。路安城に入城警備。

その後、清水自動車隊は、必縣城方面に後退する途中、
路安城一〇九師団と交代する二十師団と会う。清水自
動車隊、必縣城に駐屯しナンカンチンより路安城の二
十師団に食糧弾薬の輸送にあたる。そして、松原自動
車中隊交代清水自動車三一連隊竹田連隊に派遣にな
る。必縣城を出発十一月中頃だというのに霜がおり吐
く息で防寒帽につららが下がる真っ白な雪道をナンカ
ンチン分水嶺を通り数日後太谷城に到着、閔錫山の民

家で一泊する。

早朝、列車に車両を積み込み出発す、十二月三十日運
城駅到着、同日一等兵に、加志摩一等兵は上等兵にな
る。数日間運城にて駅前駐屯警備にあたる。新年を迎
える。その後、盛田小隊は清水中隊と別れ必縣に駐屯
している三一連隊竹田連隊に到着後、第三大隊広瀬隊
に派遣になる。川田分隊は、同日夜、行軍により歩兵
一個小隊を乗せ出発、当中満線付近に敵兵がいるとの
こと。戦闘隊体勢にて出発、数時間後、敵兵と遭遇銃
撃戦を展開敵兵を撃退、夜もしらじらと明ける頃朝食、
数時間後、河必縣に向かつて出発、途中敵兵にも会わ
ず無事フンガ橋を渡り河必縣に到着。数日間、河必縣
本隊より、毎日広瀬隊、第二中隊の駐屯しているコン
チ及び第三中隊のいるマンセンの部隊に食糧、弾薬を
輸送、夜間、敵兵に通信電話線を切断される。高木上
等兵他十五名警備兵一個分隊を乗せ修理に行く。

途中地雷が伏せてあるので前方を注意しながら行
動、電柱を修理中、我々は、敵兵の警備につく。修理
が終わり、中本一等兵が電柱より飛び降りた所に地雷

が伏せてあり爆発戦死する。死体を乗せ広瀬隊本部に。
今夜何事もなければよいがと語らい支那人の民家に
休む。十二時三十分、非常招集ラッパで目を覚ます。

本部前に集合、広瀬隊長の命令によりブンキ城に駐屯
している部隊が敵兵に包囲されているとの報告があ
る。兵隊を乗せ応援に行く。夜間のため、ライトを消
しテールランプを目印に。途中、コーバチンも通り行
くこと数時間、前車、広瀬隊の二輪目故障のため停止
修理中、自分は眠いので加志摩上等兵に前の修理が終
わるまで見ていてくれるよう頼みハンドルにもたれ、
ウツラ、ウツラ。目を覚ますと加志摩上等兵が横で寝
ている。びっくりして、前を見ると車が無い。後方を
見ると同じように眠っている。びっくりして警笛を鳴
らし発車する。数分後、前部隊の後に着きホッとす。
加志摩上等兵が分隊長にパンクしていたと報告す。
後で敵に会わずホッとす。数時間後、砲撃が始まり
敵兵と銃撃戦が展開され、数時間後、ブンキ城に入城
する。一個中隊と警備隊が全部全滅していた城壁に、
白いペンキで、「リョーマツ、ダンヤク、ツキタルモ

イヌマダオオシ」と書かれていた。戦友一同、戦死者
の霊を祈る。広瀬大隊より一個中隊が駐屯して警備に
つくことになる。

広瀬大隊はブンキ城を出発、河必縣に來隊する。数
日後、休養をとることになりホッとす。だが、○○
日より中條山脈の作戦が始まるうとしていたのだ。自
分達の分隊では知るよしも無く、呑気に朝から憲兵隊
に行き、近藤隊長、加志摩上等兵と自分と三人で、コ
ウガワの近くで十一時三十分頃支那馬を降りてツル打
ちをしようとしていたところ、敵兵側より銃撃を受け、
すぐ馬に飛び乗り後方にさがる。ホッとす。

憲兵隊近藤隊軍曹が支那人の多くいる石炭集積所に
行かれたかと思ひ、待つこと数分、スパイ一人取り押さ
え、河必縣の憲兵隊に連行する。憲兵隊にて御馳走に
なり、広瀬隊長命令により加志摩上等兵と本部に來隊
する。監普城内の歩兵、竹田三一連隊長に報告。後、
監普城内の警備に就く。そのうち、中條山脈の作戦が
あるので車両の手入れをする。

○日して中條山脈の作戦が始まり盛田小隊は歩兵を

乗せ出発。一二三号車の加志摩上等兵と自分は中島第一分隊に派遣になり、浦州城内に直行、自分達の任務はコオガハ方面に退去している支那兵八路軍の閉め出し任務に就く。数時間後、山の中腹にて待機すること数分、午後七時頃前方を敵兵がコオガハ方面に向かつて退去しているのを発見、銃撃をしながら中隊本部の宮下上等兵、中島上等兵が前より井畑上等兵が崖より後に続くようにと言われ、全員で突撃、敵兵側の迫撃砲の破片で重傷、衛生兵が担架を持ってくる。まるで丸太で叩かれたような痛さを感じた。自分は野戦病院に送られ入院する。

○日あの戦場で宮下上等兵、森島一等兵戦死と聞く。○日間が過ぎ加志摩上等兵のことが気になり、野戦病院へ本隊の連絡車が来た時、衛生兵に頼んで出してもらい、盛田小隊に帰り、小隊長、分隊長に報告。盛田小隊長は戦闘が出来るようになるまで養生したほうが良い、分隊長は足でまといになると言われたが加志摩上等兵が助手席にと助言してくれる、ホッとする。

そのうち作戦が終わり運城に帰隊する。清水部隊は

運城の警備に就く。九月中頃秋元准尉殿大原より帰隊される。自分他○○名内地帰還と言われ、嬉しかった。

十月初め中隊長他一同の見送りを受け、片岡分隊長他三十五名屯営を出発、運城駅から貨物列車で、十八時頃塩分駅プラットホームに部隊名が書いてある。良く見ると「清水自動車隊一部帰還兵につく、帰還中止になり運城に帰隊するように」と書いてある。片岡分隊長他皆びつくり、次の運城行き列車は明朝七時と聞き塩分城の兵站にて一泊、翌朝貨車にて、コウバンチ駅も過ぎ運城駅十九時頃到着、清水隊長の出迎えを受ける。

話によると、少年兵だけでは、雪化山の八路軍の作戦は無理とのこと。○日間また運城の警備、そして雪化山の作戦が始まる。川田分隊は、歩兵を乗せ出発、○○日間雪化山の討伐に参加、○日運城に戻る。

一二月一日、内地帰還のため、本隊二度目の見送りを受け運城を出発。ブンキ、コーバチン、塩分を通り二十一時頃大谷着、大谷出発からもうすぐシユフンだという時、線路に地雷が伏せてあり爆発、貨車が転覆、

右側に傾きドアが開き、振り落とされる。敵兵だと思
い貨車に飛び乗り日本刀を持ち出す、片岡分隊長初め
三十五名、銃もなく短剣だけでどうすることも出来ず、
隠れる事数分、貨車に火が回り昼のように明るく動く
ことも出来ず。

八路軍の敵兵はチャラメラを鳴らして進撃して来
る。その内、砲撃の音が警備隊に聞こえたのか鉄道隊
の装甲車が山の方角を砲撃してくれたので八路軍はチ
ャラメラを吹いて退去する。片岡分隊長始め〇名がシ
ユフン駅まで走る。駅にて点呼、二名いない、森一等
兵と山本二等兵である。明け方警備隊と共に捜査、森
一等兵が戦死、戦死者を貨車に乗せユージ駅へホーム
に山本二等兵が笑って立っている、一同驚く。山本二
等兵曰く。「シユフン駅東側の鉄橋を渡り、一気に走
って来た」とのこと、鉄橋の両側には友軍のトーチカ
があり警備しているはず、居眠りでもしていたのか？

その日、森一等兵の死体を火葬にしてユージ兵站に
て自分がお経を上げ、兵站にて一泊、清水隊に連絡。

〇日ユージを出発、石門、保定を通過して天津到着、

片岡分隊長他一名下車、兵器廠に兵器受領のため出発
される。

自分達はターク港に行く、兵站に入る。片岡分隊長
を待つ〇日、掃隊され、背囊、水筒、飯盒、凶囊、帯
剣を受ける。他の部隊の戦友達から品物を貰い、皆で
分け背囊にいれる。

昭和十五年十二月十五日、大沽港より出帆、東支那
海を航海、朝鮮半島を左側に見ながら航海、水の色は
青く透きとおっている。玄海灘も波も無く無事に通過、
島、島では、日の丸の旗を振って迎えて下さる、嬉し
かった。

昭和十五年十二月十九日、宇治港着、因島での検疫
も終わりテンマ船にて上陸、広島市内国防婦人会の出
迎えとお茶の接待をうける。二度と生きて帰って来る
とは思っていなかった。上陸した時、感極まり大粒の
涙がとめどもなく流れた。戦友の遺骨を抱いて上陸し
たので、この嬉し涙を戦友にも分けてやりたかった。

自分は、片岡分隊長に連絡し、勤めていた会社の広
島支店に行かせて貰う。広島支店にて、大阪の家族に、

「広島発二十時、大阪駅八時頃通過」と電報を依頼する。広島駅の分隊に戻り、片岡分隊長に報告。広島駅を後に、嬉しくって、嬉しくって、なかなか眠れない。通過する駅ごとにバンザイで迎えて貰い、本当に嬉しかった。岡山駅を過ぎた頃より、うつらうつらとしていた内にはや、神戸駅、ここでも、歓迎を受ける。尼崎を出るころ、大阪方面の戦友達は汽車のデッキに出ている。淀川の鉄橋を渡り、大阪駅八番ホームに滑り込むように入り停車す。ここでも、歓迎の風をうける。

構内を良く見ると義姉、妻と子供達の懐かしい顔がそこにある、元氣そうで嬉しかった。数分停車のため、言葉を交わす間もなく妻達も乗車す。京都駅で全員下車、憲兵がおり部隊は駅の裏へ隔離される。家族とも話しも出来ず、妻と子供達は大阪へ帰ることになる。自分達は午前十一時発の軍用列車にて出発、米原、敦賀、福井通過ごと歓迎をうける。金沢十七時三十分ごろ、みぞれ降るなかに到着。

金沢市民、留守部隊ラッパ隊の歓迎を受け言葉ではいい表せ無いほど嬉しかった。金沢駅広場、小雪降る

中、留守部隊が整列し、「戦死者一名、片岡分隊長他三十四名」と片岡分隊長が報告される。留守部隊長からも出迎への挨拶がある。片岡分隊長が出迎えの方々にも「本日、小雪降る中、お出迎え下さり」と敬意を表される。分隊長より留守部隊長に戦没者の慰霊を兼ね護国神社に参拝して帰還すと述べられる。バンザイの嵐の中、ラッパ隊の先導にて雨と小雪でびしょ濡れになりながら行軍、護国神社に参拝、戦死者の冥福を祈り帰隊す。バンザイ三唱の中行軍、分隊長の号令で歩調取れの足音も軽く衛門内へ。

同日、東部五十五部隊に転属、中山自動車隊に編入、十二月二十四日まで勤務・召集解除になる。

河南作戦奮戦するも無念敗戦となる

鳥取県 小林 武 夫

私は二十一歳、臨時召集。一片の赤紙にて昭和十七